

報道関係各位



北本市
kitamoto city

令和8年2月12日

北本市役所 市長公室

シティプロモーション・広報担当

秋葉 048-594-5505

koho@city.kitamoto.lg.jp

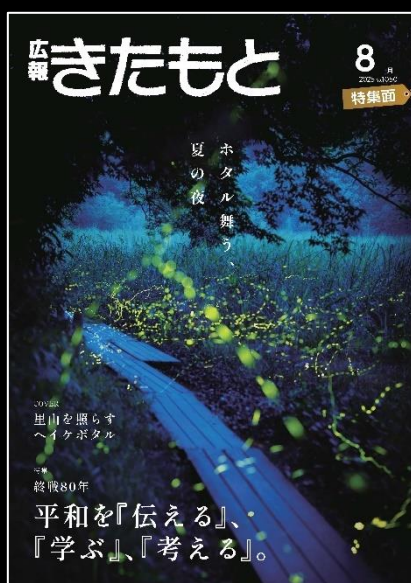
広報きたもとが

広報きたもとが広報コンクール埼玉県審査の広報紙部門・一枚写真部門・組み写真部門で1位となり、全国に進みます。

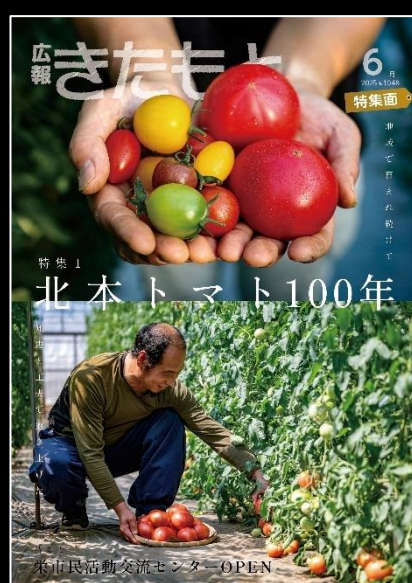
埼玉県広報コンクール3部門で1位



R7.10月号
広報紙部門(市)1位



R7.8月号
一枚写真部門1位



R7.6月号
組み写真部門1位

自治体広報の甲子園・令和8年全国広報コンクールの埼玉県審査結果が発表され、

「広報きたもと令和7年10月号」が広報紙(市)部門で1席(27点中1位)

「広報きたもと令和7年8月号」表紙が一枚写真部門で1席(36点中1位)

「広報きたもと令和7年6月号」表紙が組み写真部門で1席(25点中1位)

に選ばれました。埼玉県推薦作品として、全国広報コンクールへ進出します。

「広報きたもと」が埼玉県審査の3部門で1位に選出されたのは初となります。

埼玉県審査で1位となったのは、

- ・「財政状況伝えるマン」(職員が扮したヒーローが市の財政状況を分かりやすく伝える実写マンガ風特集)を載した平成28年11月号(広報紙(市)部門・全国広報コンクール入選)
 - ・北本の農産物の特集を掲載した令和3年7月号の表紙(一枚写真部門)
 - ・家庭や職場・学校に次ぐ第3の居場所の特集を掲載した令和4年9月号(広報紙(市)部門・全国広報コンクールで内閣総理大臣賞受賞)
 - ・「障がいへの眼差し」をテーマに障がいのあるお子さんを持つ母親たちや福祉事業所、障がい者グループホーム等取材した令和5年10月号(広報紙(市)部門・全国広報コンクール入選)
- に続いて5度目となります。



広報きたもと令和7年10月号 【広報紙部門(市部)1位】

特集「これが私の里山ライフ」全14ページを含む計36ページの広報紙。特集では、減少の一途をたどる北本の里山について、「守るべき過去の遺産」ではなく、「現代を生きる私たちに新たな豊かさを提案する里山ライフスタイル」として描くことを目的に、

- ・30年以上も雑木林の保全を続ける「北本雑木林の会」
- ・4人の子育てと会社勤めと並行して子どもも大人も集まる畑コミュニティづくりを実践する「だいじょうぶだ村」
- ・かつて“追いはぎが出そうだった”と言われた荒川沿いに、水鳥が羽を休める田んぼづくりを10年以上続ける「荒川わらの会」

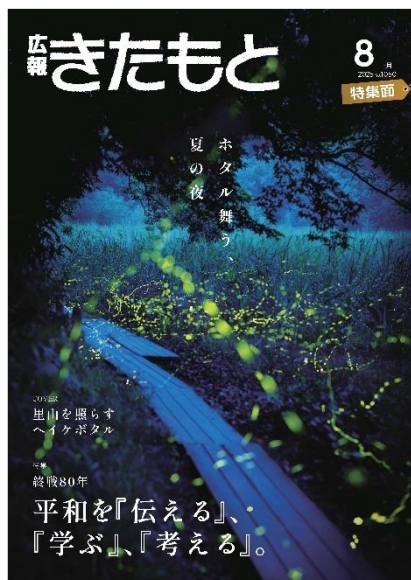
にそれぞれの生活、そして人生と里山との関わりについて語っていただきました。

また、伝統的な里山(雑木林)を活用した農の営みや地権者としての想いを、19代続く農家「いとうふあーむ」さんにお聞きしています。さらに、紙面で登場した里山の風景等を実際に歩いてめぐる「里山めぐりページ」を特集最後に掲載し、読み物としても、目で見ても北本の里山ライフの魅力を感じていただける内容となっています。

審 査 員 講 評

- 取材量、情報量に圧倒された。里山に誇りを持つ当事者たちや取材者(広報課員)の熱い思いが「これでもか」と伝わってくる。「お金を介さない世界が見たい」といった印象的な言葉をクローズアップするレイアウトは好き嫌いが分かれるかもしれないが、個人的には好きだ。
- 特集面などは民間のフリーペーパーのようなおしゃれなつくり。裏から見ると情報面という使い分けも読みやすい。
- 企画・取材・編集・デザインすべてを職員が実施している広報紙とは思えない記事力、デザイン。里山を様々な角度から広報しており、北本市で暮らすことの豊かさをイメージできる。
- 地元の資源をあますことなく紹介。かなり時間と手間をかけ、充実した内容になっている。
- 特集は編集者の思いが伝わってくる充実した構成。北本の里山ライフのすばらしさを市民目線で伝えているので、読者が北本市の魅力を改めて実感できる。写真や色味も統一感があるデザインとなっている。しかし、非常に文章量が多く、また余白が少ないので、文章を読むのが苦手な方は、読み進められない懸念も感じてしまった。

なお、コンクールの応募の際は、取材した皆さんから「ほかに活動している皆さんのことも詳しく知ることができて安心した」「SNSを中心に発信してきたが、広報紙に掲載されたことで地域からの信頼性が増した」「広報紙を読んで自分たちの活動に興味を持った人から問い合わせがあった」等のコメントをお寄せいただき、応募用紙にも反映しました。



広報きたもと令和7年8月号 【一枚写真部門1位】

北本市の昆虫「ヘイケボタル」が北本自然観察公園内の木道を飛び交う様子を収めた写真を表紙に採用しました。

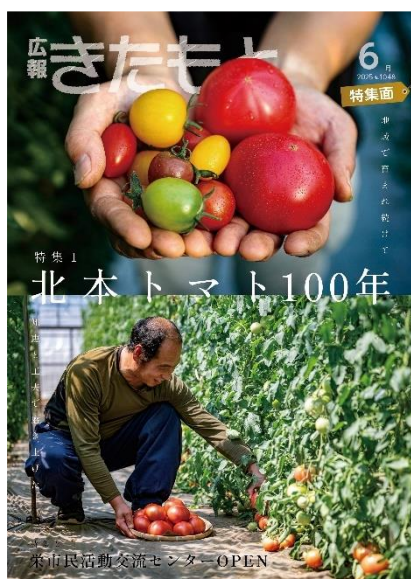
ヘイケボタルは、水が動かない湿地を好みます。北本ならではの里山「谷津」(大地を湧き水が侵食してできた地形。谷底は泥深い湿地となっている)はヘイケボタルの格好の住処であり、北本自然観察公園がこの谷津の生物多様性を保全し続けることで、現代も夏の時期にヘイケボタルを観察することができるのです。

木道を画面手前から奥に向かうような奥行きのある構図をベースにしたことで、実際に北本自然観察公園内を散策しているときの視界を表現。また、ヘイケボタルならではの点滅しながら飛び交う様子を、単焦点レンズを使うことで柔らかな光跡として収めることができました。

撮影時は、ホタルの光の邪魔にならないよう、スマホは使わないことはもちろん、カメラのセンサーライトもガムテープでふさぎ、三脚を設置した場所で通行者の邪魔にならないよう、息を殺しながら2～3時間近くシャッターを切り続けて仕上げた写真です。

審査員講評

- ネイチャー系を撮るのに、あえて木道を画角に入れる技術力が素晴らしい。この木道を入れることで、人を誘うという目的が示唆され、ここに来ればこの写真のようなホタル舞う幻想的な風景に出会えると見た人に感じさせる。また、広報紙名などが入ることも撮影時に意識しているため、トリミングの必要がない完璧な構図。
- 文字がしっかり見えるようになっている。世界観が分かりやすい、きれいな一枚。
- 真ん中にある橋と同じ位置にホタルがいて繋がっているところが、テーマである「平和」を考える、学ぶ、伝える、そういった北本にともに行こう、とホタルが道を導いてくれているよう。



広報きたもと令和7年6月号 【組み写真部門1位】

北本市は、全国でも先駆けて大正14年からトマトの栽培を開始した「トマトのまち」です。令和7年はトマト栽培が始まって100年目を迎えることから、その歴史を振り返り、現在の北本トマトの魅力を伝える特集「北本トマト100年」を掲載することとなりました。

表紙は、北本で実際に栽培される大きさも色も様々なトマトを抱えた手のアップの写真と、青々とした苗に実った真っ赤なトマトを収穫する農家さんの写真を組み合わせています。

上部の写真は、トマトの質感を際立たせるため、「広報きたもと」のロゴの上に切り抜いた大玉トマトを重ね、まるで紙面から読み手に向かってトマトが飛び出してくるような立体感を出しました。下部の写真は、苦労して育てたトマトが真っ赤に熟れたのを見て、思わず顔をほころばせながら収穫する生産者さんの表情がポイントです。いずれも市内の生産農家さんに撮影協力いただき、特集面3-4ページでは生産者のこだわりや直売所情報を掲載し、読んだ人が実際にトマトを買いに行ける内容にしています。

審査員講評

- 写真をたてた表紙で、写真家だったら冥利に尽きる。トマトを収穫している姿、緑のきれいき、トマトの盛り、どこをとってもシンプルで本当にいい写真だと思った。その写真を邪魔しない文字配置も秀逸。よく「きたもと」の文字を後ろに下げたと思った。
- 後ろに下がった「と」の丸みがトマトとちょうど重なることで、「きたもと」の「と」はトマトの「と」というのを想起できていいな、と感じる。真ん中のコピーの北「本」の横棒が写真同士の切れ目にピッタリ重なっているのも上手い。この表紙を見ると北本のトマトを食べたい、買いたいと思わされる。
- やはり生産者さんの笑顔が良い。全体の写真の抜けがよく美しい。また、写真二枚の組み写真で、サイズもほぼ同じ2枚を並べるとつい二分しがちだが、キャッチコピーが真ん中に入ることで写真同士の切れ目の違和感が薄れており、レイアウトも上手いと感じた。元写真のとおりの色印刷できるとなおよい。
- トマトの赤が引き立つ。

広報コンクールとは

全国広報コンクールは、地方自治体の広報活動の向上に寄与することを目的に、各種広報作品についてコンクールを行い、優秀団体を表彰するものです。日本広報協会の主催により、1964(昭和39)年から実施しています。

このコンクールは、都道府県別に「広報紙」「写真(一枚・組み)」「映像」「ウェブサイト」「広報企画」の部門の代表作品を決定し、全国で競います。いわば自治体広報紙の甲子園のようなものです。なお、全国広報コンクールの審査結果は、公益社団法人日本広報協会から5月初旬に発表される予定です。

担当者コメント

「自然を守ろう」だけじゃ、活動は続かない——これは、北本の里山の保全に従事する、ある市民の方の言葉です。生活必需でなくなってしまった里山をこれからの世代にも伝えるために何ができるかを考え、たどり着いたのが、里山ライフの魅力を伝える本特集でした。保全する皆さんが里山と関わる生活を続けていくうちに、人生の在り方そのものまで大きく影響されていくストーリーに、私自身も大きく魅せられていきました。「雑木林はクッション」「お金を介さない世界が見たい」といったその人だからこそ語ることのできる言葉に象徴されるように、どこにでもあるように見える里山を北本オリジナルの魅力として伝えることができたと思います。取材協力いただいた皆さんに心から感謝を申し上げますと同時に、今回の結果を通じて北本らしい里山やホテル、北本トマトの魅力をより多くの方々に知っていただきたいと思います。